

語順と語の多義性

嶋 田 裕 司

Word Order and the Problem of Polysemy of Words

Hiroshi SHIMADA

1. はじめに

日本語と英語の表現を比べてみると、様々な違いがあることに気がつく。動詞とその補部に限って比べても、日本語と英語が一对一の対応を示さない場合がある。たとえば、よく似た状況を表わす日英の動詞を比較すると、動詞の意味範囲が完全には重なり合わないことのほうが普通である。日本語の「見る」の基本的意味に相当する英語は look と see であり、この二つには意味の違いがあることはよく知られている。また、「聞く」にあたる英語としては listen と hear があり、この二つにも look と see に似た違いがある。いずれも、一つの日本語の動詞に対して複数の英語の動詞が対応している。さらに、動詞の補部を比較しても、日本語と英語の表現にずれがあることに気がつく。たとえば、Listen to me. を日本語に訳して「私の話を聞きなさい」とは言えるが、「*私を聞きなさい」とは言えない。前置詞や助詞を除外して比べると、日本語では、「話」という語を補う必要がある。

このような違いは、個別にはよく知られている。上の例も英和辞典や和英辞典では語義として述べたり、例文とその訳文として示したりしている。ところが、なぜこのような相違が生じるのかと問うと、答えはそう簡単には見出せない。偶然そうになっているにすぎないとも考えることもできる。しかし、動詞の意味範囲のずれと補部表現の相違は、同一の要因によって引き起こされていると考えることもできる。この後者の可能性を探ることが、ここでの目的である。

小論では、日英語の動詞とその補部の関係を、語順という観点から考えることにする。そのために、動詞の意味の記述に関しては、認知言語学のカテゴリー論と認知文法論の基本的な考え方を受け入れる。¹ したがって、語の意味には、典型的意義と派生的な意義があり、それらは何らかの認知的な動機によって結びついているという前提を受け入れることになる。しかし、小論の目的は、動詞の意味を記述することにとどまらず、日本語と英語の比較をすることにある。上で見た相違は、形式と意味の関係を記述する方法のみでは説明することができない。以下では、時間的広がりの中で語順に従って語の解釈が起きるという仮説を受け入れると、上の相違に説明を与えることができることを示したい。

初めに第2節で、文の意味解釈の順序と意味情報の分布についての大まかな枠組みを述べる。第3節では、日本語の「見る」「聞く」とそれに対応する英語の動詞の意味範囲を記述し、第4節では、それらの補部を比較する。これらの具体例を通して、語の意味解釈と語の出没の問題は、語順という観点から考察する必要があることを示したい。

2. 文の理解と語順

言葉の理解は、時間的広がりの中で展開する現象である。あることがらを言葉で表現して人に伝えるとき、その表現を構成する要素は時間順に配列される。要素は、音、語、文などの幾つものレベルで認めることができるが、どのレベルをとっても時間の経過に伴って要素が順に現われること

に変わりはない。このことは、話し言葉に限らず、書き言葉にも当てはまる。言葉を発音する代わりに、文字を用いても、文字は時間順に書かざるをえない。また、表現を発する場合と、それを受け取る場合に分けて考えたとしても、発する側は言葉を時間順に表現し、受け取る側も、その順に受けとめることになる。

言葉を構成する要素は、時間順に配列されるばかりでなく、幾つか集まってより大きなまとまりとなる。その大きなまとまりも時間の経過の中で作られる。つまり、時間的な広がりの中で、要素が配列されながら、より大きな単位が認められていく。語とそれが構成する単位に限って考えると、たとえば、「太郎の妹がリンゴを食べた。」と言うとき、最初に「太郎」と「の」がまとまり、次に「太郎の」と「妹」がまとまり、それに「が」が付いて、「太郎の妹が」という更に大きなまとまりになる。次に、「リンゴを」と続けた後で「食べた」という動詞が表現され、既に表現された部分と合成されて、出来事を表わすまとまりを構成する。

上で「まとまり」と呼んだものは、文法上の単位であるばかりでなく、語を連ねて構成した意味の単位でもある。言葉は音と意味の結合であるので、語も、語のまとまりも、音と意味の結合である。「たろうのいもうと」という音声は、名詞句という文法上の単位であるばかりでなく、〈太郎の妹〉という意味を表わしている。このことは当然であるけれども、語の時間軸上の配列がその意味解釈に及ぼす影響について考える上では忘れてはならないことである。小論の目的は、語順と統語構造の表示について考えることではなく、語順と意味解釈の関係を考えることである。²

語を連ねてまとめた意味を構成することを、句の意味合成と呼ぶことにしよう。上の説明を言い換えれば、言葉を理解するとき、語が配列されながら句の意味合成が起きると言うことになる。時間軸上で、語の配列と句の意味合成は、どのように行なわれるのであろうか。ここでは次のように仮定する。語は、音と抽象的な意味の結合として記憶されている。心の中には、時間順に語を表示して意味合成を行なうための仕組みが備わっている。ある語が選ばれてそこに表示されると、その語の抽象的な意味が具体的知識に合うように解釈される。しかも、その解釈は表示と同時に確定し、再解釈されることはない。また、句の意味合成は、語が表示され解釈される過程と同時に進行する。たとえば、「太郎の妹が」という場合、「太郎・の・妹・が」という四語がこの順に表示・解釈され、それと同時に三重の句としてその意味が合成される過程が進行する。同様に、「太郎の妹がリンゴを」まで配列した段階では、「太郎の妹が」と「リンゴを」のそれぞれの句の内部では、語の表示・解釈と句の意味合成が既に終わっているが、二つの句の関係は確定しておらず、次に「食べる」が表示・解釈されるとき、初めて二つの句と「食べる」が意味合成される。要するに、語は、時間順に表示されるたびに、その解釈が確定するとともに、既に解釈されている部分に合わせて句の意味の一部となる。以上のことを整理して述べ直すと、次のようになる。

(1) 文の理解についての仮説

- a. 文の理解は、時間的広がりの中で行なわれる。
- b. 語は音と抽象的な意味の組み合わせとして記憶されていて、それが時間的広がりの中で表示されると、具体的知識に一致するように解釈が確定する。
- c. 語は、既に解釈されている語の後に表示されると、可能な限りそれに矛盾しないように解釈されて、句の意味を合成する。
- d. したがって、語の意味解釈と句の意味合成は、その語が表示されるときに同時に起きる。

小論の目的は、語順が動詞とその補部（目的語）の意味解釈に及ぼす影響について、日本語と英語を対照させながら考察することである。よく知られているように、主要部と補部の順序は、日本

語では主要部が後、英語では主要部が先である。(2)の例のように動詞句の場合、日本語では補部の後に動詞が表示され、英語では動詞の後に補部が表示される。通常、その逆の順序は許されない。

- (2) a. 花子がリンゴを食べた。
b. Hanako ate an apple.

文の理解の仮説(1)に従うと、語は配列順に解釈が確定するので、(2a)と(2b)では主要部と補部の意味解釈の順序が異なることになる。しかし、この二つの文は意味がほぼ同じなので、語順の相違が語の意味解釈と句の意味合成に影響を与えることはないように見える。ところが、日本語と英語の文は、(2)のように名詞と動詞が一对一で対応する例ばかりではなく、次のように、日本語の補部が英語の補部より複雑になる場合もある。

- (3) a. 太郎は花子の姿を見た。
b. Taro saw Hanako.
(4) a. 太郎は彼女の話聞いた。
b. Taro listened to her.

(3a)と(3b)、また(4a)と(4b)がほぼ同じ状況を記述できるにもかかわらず、日本語の例文中の「姿」「話」に対応する名詞は、英語の文には表現されていない。なぜ、このような違いが生じるのであろうか。小論では、このような相違は、文の理解の仮説(1)に加えて、句の意味合成を容易にする次の原則があるために生じると考える。

- (5) 句の意味合成の容易さの仮説
a. 句の意味合成は、その句の内部で先に表示されている語の意味情報が多いほど容易になる。
b. したがって、この容易さを保とうとする力が働く。

この仮説が述べていることは、句の意味を合成する際には、既に解釈されている情報量が多いほど後から表示される語の解釈が狭く予測されて、意味合成が容易に進むということである。また、言語は、それを保障するような仕組みになっているということである。

(5)によれば、句の意味合成を容易にするために、日本語では補部の意味情報への依存度を高め、動詞の意味情報への依存度を低くすることが予測される。極端な場合、意味が全て補部に込められて、動詞には意味がなくなることも考えられるが、たとえ意味上は動詞が不要になっても、動詞を表現しない訳にはいかない。主要部がなくなれば、主要部と補部という関係が消滅し、句として成り立たなくなるからである。そこで、日本語では、句の合成を容易にするために、意味情報が補部と主要部に分散することが予測される。それに対して、英語では句の意味合成を容易にするためには、先に現れる動詞に意味情報を込めることが予測される。動詞は単独でも動詞句を構成できるので、極端な場合、全ての情報を動詞に込めて、補部が無くなることもありうることになる。

以下で行なうことは、上の仮説が予測することを、具体例の中で観察することである。

3. 動詞の意味とその解釈

最初に動詞の意味とその解釈について、日本語と英語の例を比較する。観察する動詞としては、

日本語の「見る」「聞く」とそれに対応する英語の動詞を選ぶ。この二つの動詞は、基本的な知覚を表わすため、文化の相違を越えて、英語においても対応する動詞が存在する。したがって、動詞の意味範囲を比較することがある程度可能であり、語順が語の意味に与える影響を見いだしやすいと思われる。

(5)の仮説によれば、句によってある意味を表現するとき、先に表示される語に込められる意味情報が多くなる。日本語では、補部が先、動詞が後であるから、動詞句全体の意味情報のうち動詞に込められる情報量が少なくなる。言い換えれば、動詞の表わす意味範囲が広がる。同じ意味情報を英語の動詞句で表わす場合には、逆に動詞が先に来るので、動詞の情報量が多くなる。すなわち、動詞の表わす意味範囲が狭く限定される。したがって、ある範囲の意味を日本語の動詞が表わす場合、英語ではその範囲を複数の動詞が分割して受け持つことが予測される。

3. 1. 日本語の動詞「見る」

日本語の動詞「見る」の多義性を、主に辞典の意味区分に基づいて観察しよう。³「見る」には、少なくとも次の例文で示すような解釈がある。解釈の微妙な違いは、文を構成する他の語から判断することとする。

- (6) a. 太郎は花子を横目で見た。
- b. 太郎は花子の姿を見た。
- c. 毎朝彼は新聞を見る。
- d. 会社は彼を有能だと見ている。
- e. 親が子供の勉強を見る。
- f. 花子はスープの味を見た。
- g. 花子はその料理を食べてみた。

(6a)では、「見る」の表わす意味のうち、「横目で」によって、主体である太郎の表情に注目していることがわかる。見ることには、目を向けることとそれによって対象を知覚することの両方が含まれるが、この例では、目を向ける表情、つまり身体動作が特に問題となっている。(6b)では、「姿」があるため、目を向ける表情というよりは、対象を知覚することに解釈の重点が移っているように思われる。(6c)は、見る対象が「新聞」なので、単に目を向けてその存在を知覚するだけでなく、その内容を理解することにまで解釈が広がっている。(6d)では、「彼を有能だと」によって、「見る」が対象の理解にとどまらず判断をも表わしている。さらに、(6e)では、「子供の勉強を」があるために「見る」が適切な対応をとることまでも表わす。「しばらくこの子を見ていてね。」と言われれば、普通の状況ではその子の世話を頼まれたことになるので、たとえ「勉強」「面倒」などの表現が無くても、「見る」は、対象の認識と判断に基づく適切な行動をも含意することになる。(6f)のように「スープの味を見る」場合には、視覚のみに頼る解釈は不可能になる。そこで、この例は、「見る」の解釈として知覚と判断に焦点を合わせると、視覚の部分がぼやけてくることを示していると考ええる。最後の(6g)の「みる」は補助動詞と呼ばれているが、<ために…する>という辞典の記述には、知覚と判断の意味が込められていると言えよう。⁴

「見る」の意味範囲は、ものに目を向けることから、視覚による知覚、理解、判断、適切な行動にまで及ぶ。この意味の広がりを書述するために、意味の範囲を幾つもの意義に区分して、各意義を動機付けの関係によって結ぶこともできる。⁵しかし、ここでは別の可能性を探ってみよう。上で記した「見る」の意味範囲は、視線を向けて知覚することから始まる一連の認識と行動の過程である。

ひとたび対象に目を向ければ、その後の過程は自動的に辿ることになると言ってもよい。そこで「見る」の意味はこの一連の過程であると考えて、(7)に示すような順序で並ぶ動作と認識の連鎖であると仮定する。

(7) 「見る」：＜ものに目を向け＞＜視覚を用い＞＜知覚し＞＜理解し＞＜判断し＞＜世話をする＞

ただし、この連鎖のうち初めの方が具体的でかつ典型的な部分である。他の語によって特に指定されなければ、「見る」は典型的な解釈を受ける。たとえば、「太郎が空を見た」という文は、太郎が空に目を向けて視覚で知覚するところまでは表わしているようだが、その先の理解と判断が伴うかどうか不明確のように思われる。また、他の語によって焦点を絞られることもある。「横目で見る」「じろじろ見る」は、目を向ける動作に焦点を合わせ、「花子の夢を見る」は、目を開かずに一種の視覚的知覚を行ない、「スープの味を見る」では、視覚を用いずに知覚して判断する。「子供の勉強を見る」「親の老後を見る」では、更に焦点が後ろに移っている。一連の過程のどこかに焦点が絞られると、そこから離れた部分は意味がぼやけてくる。

日本語の「見る」は、意味の範囲が広い。仮説(5)の用語を用いれば、意味情報が少ない。「見る」が、広い意味範囲の特にどの部分を指していると解釈されるのかは補部によって決定される。文の理解についての仮説(1)によれば、語が表示される順に句の解釈が進行するのであるから、日本語では補部の解釈が確定してから主要部の動詞の解釈が行なわれる。したがって、補部が決まれば、動詞は、たとえ語としての意味が広くても、補部の解釈に矛盾しないように焦点を絞った解釈を受けることになる。

3. 2. 英語の動詞 look, see

次に、日本語の「見る」に対応する英語の動詞について考えよう。よく知られているように、「見る」の意味範囲は、look (at) と see が分割して表わしている。和英辞典には、look と see が「見る」に対応する語として挙げられている。look は＜見ようとしてそちらへ眼を向けること＞であり、see は＜目に入ること、見えること＞である。⁶ つまり、look は主体がものに目を向ける動作を表わすのに対して、see はそのような動作は表わさず、目を通して知覚することを表わす。したがって、次の例(8)のように look と see は使い分けられる。また、look と see に伴う副詞の種類が異なることも、この区別があることを裏づけている。look には、(9)のように carefully, steadily, hard など主体の態度を表わす副詞と straight, sideways, back など視線の方向を表わす副詞が伴いうる。それに対して、see には、(10)のように clearly, dimly, plainly という明瞭度の副詞が伴うが、態度や方向の副詞が伴う例は見つからない。⁷

(8) ... if you look at the picture carefully you will see that something else is going on at the same time.

- (9) a. When I looked carefully at the first page. . . .
 b. Crook looked steadily at the older man's profile.
 c. Liz looked hard at him.
 d. She looked at me very straight.
 e. He looked sideways at Angela,
 f. She looked back at him. . . .

(10) a. . . . he saw her clearly by the corridor light. . . .

- b. . . . and the two large fans which I could dimly see. . . . N06 0440
 c. . . . you can see that very plainly by the blots in this letter. F18 0780

look と see には上で述べた違いがあるが、その区別が厳格ではないことを示す例もある。すなわち、look の意味が物の知覚や認識にまで拡張して解釈されることがある。ものに目を向けることは、その存在を認め、それについて考えることにつながる。

- (11) a. You should get the doctor to look at that cut. LDCE
 b. We need to look very carefully at ways of improving our efficiency. LDCE

(11a) の例を用いると、医師が傷に目を向ければ、診断することにつながる。また、(11b) では、効率を良くする方法に目を向ければ、それについて考えることになる。⁸ look の意味が see の意味範囲にまで広がっているのであれば、日本語の「見る」の意味範囲を look と see が分割しているのではないことになり、仮説 (5) が予測することに合わなくなる。しかしながら、look が心の動きを含意しても、その基本的意味である主体が目を向ける動作は保たれているために、see ほど純粋な知覚に近づくことはないと思われる。

英語の look と see を日本語の「見る」の意味範囲に合わせてみると、およそ次に示すようになる。

- (12) <ものに目を向け><視覚を用い><知覚し><理解し><判断し><世話をする>
 「見る」: _____
 look : _____
 see : _____

ただし、二重線は基本的意味、一重線は拡張した解釈を表わす。また、日本語では、仮説 (1) によって基本的意味が失われた解釈が可能となる。日本語では、「横目でじろじろ人を見る」こともできれば、「目を閉じてスープの味を見」たり、「寝ている間に太郎の夢を見」たり、「疲れた目を閉じてみる」こともできる。つまり、「見る」が目を向ける動作を表わすこともできれば、目を使わない知覚や判断を表わすこともできる。このように「見る」はその典型的な意味である<ものに目を向けて知覚する>ことから焦点が外れ、補部の指定する意味に矛盾しない解釈を受けることがある。しかし、英語では、*look at the taste/dream と言うことはできないので、look は、上の (11) のように解釈が広がっても、視線を向けるという意味を失うことはない。

このことは、文の理解の仮説 (1) に一致する。英語では、句の先頭にある動詞の意味解釈が先に確定するので、look はその典型的な意味から離れない解釈を与えられる。つまり、look は、目を向けるという身体動作の意味から離れることができないため、その後、taste, dream のような視線の対象にならないものが補部に来ると、矛盾無く意味合成を行なうことができない。ところが、日本語では、動詞が補部より後で解釈されるために、「スープの味を」「太郎の夢を」の後に来た「見る」は典型的な意味から離れた解釈を受けることが可能である。

look だけでなく see の場合にも *see the taste/dream という言い方はない。このことも、look と同様に、英語では主要部が先に来ることと、解釈が語の表示の順に決まることによって説明できる。see は、句の先頭で<視覚でものを知覚する>という基本的な意味に解釈が定まるので、視覚以外の対象である taste/dream を目的語としてとることはできなくなる。ただし、see には、<ことを理解する>意味もあるけれども、この場合には、次の (13) のように目的語として<こと>を表わす節

または派生名詞が入る。

- (13) a. I can see that you're not very happy with the situation. LDCE
 b. Do you see what I mean? LDCE
 c. Seeing his distress, Louise put her arm around him. LDCE

日本語の「見る」の意味範囲のうち、基本的な意味の部分は、英語では look と see が分け持っている。look は目を向ける動作を表わし、see は視覚による知覚を表わす。(12)に示すように、それぞれは、知覚や理解の方向へ一段階拡張されうるが、基本的な意味が失われないために、日本語の「見る」ほど広い範囲を表わすことはない。これらのことは、仮説(1)と(5)が予測することである。

3. 3. 日本語の動詞「聞く」

さて、次に日本語の動詞「聞く」の多義性に目を移そう。「聞く」についても、「見る」の分析に際して行なったのと同様に、個々の意義を一連の行為と認識の過程として整理してみよう。初めに、(14)の例文を用いて「聞く」に与えられる主な解釈を確認する。

- (14) a. 花子は物音を聞いた。
 b. 花子は音楽を聞いた。
 c. 太郎は次郎の話をじっくりと聞いた。
 d. 太郎は次郎から花子が結婚したことを聞いた。
 e. 太郎は私の年齢をしつこく聞いた。
 f. 次郎は親の言いつけを聞いた。

(14a)では「聞く」は「物音」を目的語にとって、音を耳から知覚することを表わしている。(14b)のように「音楽」が目的語になると、知覚した対象に意味や価値が伴うことになる。さらに、(14c)では「話」を聞くことになるので、音よりもその内容を理解することに解釈の重点が移ることになる。(14d)で、目的語が「花子が結婚したこと」になると、「聞く」対象は音声ではなく、＜こと＞すなわち出来事や状態に関する言語情報であることが明らかになる。すなわち、「聞く」は＜こと＞についての情報を得るという解釈になる。(14e)では「しつこく」があるので、そのような言語情報を得るために人に働きかける解釈になり、「太郎は私の年齢をしつこく聞いたが、私は答えなかった」のように結果は問題ではなくなる。したがって、(14d)と(14e)では、解釈が結果に傾くか努力に傾くかの違いがあるが、＜こと＞情報を求めるという点では同じである。次の(14f)では、「親の言いつけを聞く」ことは、親の言ったことの意味が分かるだけでなく、それを受け入れて行動することと解釈するのが普通である。この「聞く」の解釈は、音を聞く場合から更に遠ざかって、＜こと＞情報に含まれる要求に従うこととなる。つまり、ここでは、「子供の面倒を見る」という例で「見る」が世話をすることまで含意するのと同じことが起きていると思われる。

(14)の例文で示した「聞く」の解釈を、聞くことに関する一連の行為と認識の過程として連結してみよう。「聞く」こととは、声や音を耳を通して知覚し、その意味を理解し、言語音であれば、そこに込められた＜こと＞に関する情報を求め、その内容が要求や忠告であれば、受け入れるという認識と行動に関する連鎖であることになる。短くまとめて次のように表記しよう。

- (15) 「聞く」：＜音を知覚し＞＜意味を理解し＞＜こと情報を求め＞＜要求を受け入れる＞

「聞く」ことは、音の認識に始まり、言葉による情報を得ることから、相手の要求に同意することにまで及び、この意味の広がりとは、「見る」について観察したことに平行している。

3. 4. 英語の動詞 listen, hear, ask

「聞く」に対応する英語の動詞は、listen, hear, ask などがある。このうち音を対象とする動詞は、listen と hear であるが、listen の基本的意味は＜音を知覚しようと注意を向ける＞ことであり、その結果として聞き取れたか否かは問題にしていない。それに対して、hear は＜音の知覚ができた＞ことであり、その際の態度については不問である。音に伴う意味に関しては、listen は＜意味を理解しようと努める＞ことであり、hear は＜意味を理解した＞ことを表わす。つまり、listen は態度を表わし、hear は結果を表わすという明確な区別があり、次の例文はその使い分けを示している。

- (16) a. She listened, in the doorway, desiring fairly seriously to hear a sound, any sound at all.
 b. My clerk was listening on the other extension and heard the whole conversation.
 c. They heard me well enough, but never really listened to what I was saying.

(16a) は音に関して、(16b) は音と意味に関して、(16c) では heard が音に関して、listened が意味に関して態度と結果を語っている。さらに、この区別は、副詞の種類の相違にも現れている。listen には態度を指定する carefully, closely, intently が伴い、hear には明瞭度を表わす clearly, well が伴う。

- (17) a. Listen very carefully to what your children tell you,
 b. But listen to it closely,
 c. We listen intently for a while. . . .
 (18) a. Although she could hear the words quite clearly, she found they made no sort of sense.
 b. Only Barney couldn't really hear her too well because of the screen banging shut behind him.

ところが、listen が態度を表わし、hear が結果を表わすという区別が上で見た例ほど明確で無い場合がある。つまり、listen が態度のみならず、結果までも意味していると考えられる文脈がある。

(19a) のように否定文においては、態度を否定すれば結果までも否定されるものとして解釈されるであろうが、(19b) の文中では listened が耳を傾ける態度の結果として、意味まで理解したと解釈されるのが普通であろう。

- (19) a. I didn't listen to advice from my father until I was in my late teens,
 b. But he listened to me and agreed finally.

しかし、このような場合でも、態度の意味が失われていると考える理由はないので、結果の意味は、付随的に含意されているだけだと考えてよいであろう。

さて、次に＜こと＞を対象にする場合に目を移そう。音とその意味を対象にするときには、listen と hear が態度と結果を分け持っていたが、音から離れた＜こと＞を対象にする場合には、hear と対立するのは ask になり、listen にはならない。次の (20a) は、＜こと＞を得たことを表わす hear の例であり、(20b) と (20c) は、＜こと＞を求めて働きかける態度を表わす ask の例である。この ask を listen (to) に替えることはできない。

- (20) a. I hear you've been selected to play for the A team. LDCE
 b. She asked an old man the way to the station. LDCE
 c. Go and ask Pat whether he's coming tonight. LDCE

音の知覚結果を表わす hear が、＜こと＞に関しても、それを得た結果を表わすように拡張されるのは、音声を知覚することが、普通は自動的にその意味を理解することにつながるからである。それに対して、音を求める態度を表わす listen が＜こと＞を求めるように拡張されないのは、＜こと＞を求める際の実際の行動は、言葉で人に働きかけることであり、音を聞こうとして耳を澄ますこととは異なるからである。つまり、listen の基本的意味である＜音に注意を向ける＞態度は、主体自身の中で完結する行為である。それを、人に働きかける行動にまで拡張することには無理があるということであろう。このことは、仮説 (1) と (5) に一致する。(5) によれば、英語の動詞は補部より先に表示されるので、意味情報が多くなる。すなわち、意味範囲が狭くなる。しかも、(1) によれば、その意味は補部より先に解釈されるために基本的意味から外れることはない。

「聞く」に合わせて listen, hear, ask の意味範囲を図で表わすと、およそ次のようになる。

- (21) ＜音に注意を向け＞＜知覚し＞＜理解し＞＜ことを求め＞＜受け入れる＞
 「聞く」： _____
 listen： _____
 hear： _____
 ask： _____

ここでも、「聞く」の意味範囲は、英語では複数の動詞が分け持っている。それぞれの動詞は、意味が拡張しても基本的意味は失わず、意味が拡張する範囲は狭く保たれている。この点は、「見る」と look, see の関係によく似ていて、仮説 (1) と (5) に従うこととなる。

4. 補部の解釈

日本語の「聞く」と英語の listen to, hear の補部の解釈を比べてみよう。英語の listen to と hear の目的語の位置には、当然のことながら音や声を表わす語、言葉を表わす語がくる。

- (22) a. He listened to the music. LDCE
 b. Did you hear that noise? LDCE

しかし、その位置には、音や言葉を表わす語に限らず、その源を表わす語がくることもある。たとえば、次の (23) では listen to の目的語として people, the rain が、hear の目的語として the stream, ..., the boot... が入っている。しかし、厳密に言えば、聞く対象は音であり、その音源ではありえないので、例えば (23a) では、people の解釈は＜人々＞それ自体ではなく、＜人々が話すこと＞で

ある。また、(23b) では、the rain は、＜雨＞ではなく、＜雨の音＞である。

- (23) a. I took a long time to listen to people. . . .
 b. So you sit in the car and listen to the air run out and listen to the rain and see the mud. . . . P09 0440
 c. He could also hear the stream which he had seen from his position. K02 0680
 d. I hear the boot of Lucifer, D01 0940

ところが、このような表現に対応する日本語の表現は、「*人々を聞く」「*雨を聞く」ではなく、「人々の言うことを聞く」または「人々の話を聞く」、「雨の音を聞く」としなければならない。つまり、日本語では「言うこと」「話」「音」を補うと自然な表現になる。⁹

- (24) a. *太郎は花子を聞いた。
 b. 太郎は花子の話を聞いた。
 (25) a. *次郎は雨を聞いた。
 b. 次郎は雨の音を聞いた。

したがって、英語では、音源を表現することによって音を指し示すことができるのに対して、日本語ではそれができない。言い換えれば、英語では、動詞によって動機付けられたメトニミーがこの位置に生じて、音源が音の代わりとなっているが、日本語の補部では、このようなことが起こらない。ただし、「ラジオ」「レコード」のように音源としての意味を持つ語の場合には、単に「ラジオを聞く」「レコードを聞く」と言うことができる。

このことは、文の理解についての仮説(1)によって説明できる。意味の合成は、語が表示される順に行なわれるのであるから、英語では、listen to までの意味を解釈すれば、次に表示される補部は、音または言葉としてしか解釈できないことになる。したがって、補部に実際に現れる表現が people や rain のように音や言葉の意味を持たない場合には、確定している動詞 listen の解釈に合わせるために、これらに基本的意味から離れた解釈が与えられる。これが音源によって音を表わすメトニミーである。日本語の場合に「*人々を聞いた」と言えないのは、「人々を」の意味が先に解釈された段階では、音源とは認められず、次に「聞いた」が表示された段階で整合性のある解釈ができなくなるためである。英語と同じことを表現するためには、日本語では「人々の話を聞いた」と補部に「話」を補って、前もって動詞の要求に合わせておく必要がある。

英語では、出来事や物を表わす名詞が音源としても解釈できるとき、その名詞は更に音の意味まで持つようになることがあると思われる。次の例では、shots と footsteps が＜こと＞や＜もの＞から音源、音へと意味を広げていくように見える。

- (26) a. Four shots were fired by the suspect,
 b. . . . we heard the sound of shots being fired. . . .
 c. She heard the shots. . . .
 (27) a. The priest. . . retraced his footsteps across the central area beneath the lantern,
 b. Marchenkov hears. . . the sound of footsteps,
 c. I hear footsteps in the hall.

対照的に、日本語では、物事を表わす語が、そのままの形で音を表わすことはなく、音を表わすには「音」「声」という語と結合する必要がある。(26c) と (27c) の shots と footsteps に対応する日本語は「銃声」と「足音」であろう。

- (28) a. 彼女は銃声／発砲音を聞いた。
 b. *彼女は銃／発砲を聞いた。
- (29) a. 私は廊下の足音を聞いた。
 b. *私は廊下の足／足取り／足跡を聞いた。

「物音」「川音」「歌声」「鳴き声」など、「音」「声」を主要部とする複合語は多い。このような複合語化も、日本語の補部において語の基本的意味が保たれることの一つの現れである。つまり、英語では、(26) (27) のように、物事を表わす語が音を表わす解釈を受けるようになるのに対して、日本語では、そのような解釈の柔軟性は見られず、音や声を表わすためには「音」「声」という語を表出して複合語化する必要がある。

以上、英語と日本語の補部を比較してきた。listen to と hear の目的語にはメトニミーが働いて語の本来の意味から離れた解釈が与えられること、日本語の「聞く」の目的語の位置では「音」「声」が明示されて、語の基本的意味が保たれることを見た。この対照的に見える現象は、語順という観点から見れば、同じことが起きていると考えることができる。どちらの場合にも、時間的広がりの中で先に表示される語に込められた意味情報が多くなっている。したがって、これらの例は、仮説(1)と(5)を支持すると見なしてよいであろう。

ついでながら、ここで日本語内部に目を向けて、「聞く」と「見る」の相違を確かめておこう。「聞く」には、「話」「声」などの語が必要であることを上で述べたが、「見る」には、「姿」「様子」などの語はあっても無くてもよい。(30) (= (24)) と (31) を比べてみよう。

- (30) a. *太郎は花子を聞いた。
 b. 太郎は花子話を聞いた。
- (31) a. 太郎は花子を見た。
 b. 太郎は花子の姿を見た。

このような相違は、「見る」が＜もの＞(とその属性)の領域を対象とするのに対して、「聞く」が音と＜こと＞の領域を対象とすることによると考えられる。「花子」などの人物は＜もの＞の領域に属するので「見る」ことはできるが、「聞く」ためには対象を音と＜こと＞の領域に移す必要があり、その働きをするのが「話」である。(また、(25) (28) (29) では「音」である。)したがって＜もの＞と比べて＜こと＞は有標である。それに対して、「見る」の場合に(31)のように「姿」があっても無くてもよいのは、人もその姿も＜もの＞の領域に属するからである。ただし、(31a)と(31b)では、「花子」に対する影響に関して意味が異なる可能性がある(嶋田(2000)参照)。(31b)のように「姿」が表現されると、動詞「見る」の中に込められてもよいはずの意味成分が補部の位置に表出されて、その分だけ動詞の意味情報への依存度が減少する。この点に関しては、「姿を見た」において、(30b)の「話を聞いた」と同じことが起きている。

＜もの＞と＜こと＞の区別は、「見る」と「聞く」の拡張された解釈の相違にも説明を与えることができる。＜もの＞には手で触れて影響を与えることができるが、＜こと＞には、そうすることができないという素朴な身体的経験が、拡張された解釈の内容を決定していると思われる。(7)で示

したように、「見る」には「スープの味を見る」「風呂の湯加減を見る」「子供の勉強を見る」「親の老後を見る」のように、＜調節する＞ことあるいは＜世話をする＞ことまでも含む解釈がある。一方、「聞く」には、(15)に示したように、「親の言いつけを聞く」「弟のわがままを聞く」のように＜相手の要求を受け入れる＞という解釈がある。さらに、酒の味を舌で判断することを「聞き酒をする」と言う。また、魚釣りで当たりがあったかどうか判断するために軽く竿を上げてみることも「聞く」と言う。このような表現を比べると、＜もの＞の領域を対象とする「見る」は、物を視覚的に認識することにとどまらず、物に手で触れて働きかける行為にまで解釈が広がるのに対して、＜こと＞の領域を対象とする「聞く」は、＜こと＞が具体物でないために働きかける解釈が成り立たず、要求を受け入れることや、判断することを表わすにとどまることがわかる。

5. ま と め

小論では、日本語の動詞「見る」「聞く」と、それに対応する英語の動詞 look, see; listen, hear, ask を比較した。「見る」と「聞く」の意味は、それぞれ＜ものに目を向ける＞動作と＜音に注意を向ける＞態度から始まる一連の行為と認識の連鎖であると仮定した。この連鎖を動詞の意味範囲と呼ぶと、「見る」と「聞く」の意味範囲は、英語では複数の動詞が分け持っているということになる。つまり、「見る」「聞く」より、英語の look, see; listen, hear, ask の方が意味範囲が狭い。すなわち、日本語の動詞に比べて、英語の動詞の方が情報量が多いということになる。

動詞の補部は、日本語では詳しく表現され、英語では大まかに表現される。日本語の場合には、補部の表現を詳しくすることによって動詞の意味範囲のどの部分に焦点を合わせるのかを示している。英語の場合には、逆に補部の表現は大まかになり、動詞の意味に基づいて補部表現の解釈が詳しく決められる。言い換えれば、日本語では補部の情報量が多くなるのに対して、英語では補部の情報量は少なくなる。ここまで述べたことに、語順という観点を加えて図式的に表わすと次のようになる。

(32)	語 順：	先	後
	日本語：	補部	動詞
	英 語：	動詞	補部
	情報量：	多い	少ない

このように、ある意味を表現する際に、動詞とその補部がどの程度意味を分け持つのかという観点から考えると、日本語と英語は対照的である。しかし、語順という観点から見直すと、どちらの言語でも同じことが起きていることになる。すなわち、時間的に先に表現される語は情報量が多くなり、後から表現される語は情報量が少なくなる。したがって、このことは(5)の仮説を支持していると思われる。一般に、句の意味を合成する操作は、時間的に先に表示される語の意味情報が多いほど容易に行なわれ、また、それを保証するように語に意味が割り当てられている。

語の情報量とメトニミーには関係がある。先に表示される語では基本的な意味に近い解釈がなされ、後から表示される語ではメトニミーが起きて、基本的意味から外れた解釈が与えられる。このことは、文の理解の仮説(1)を支持していると思われる。語が表示される順に解釈が進行するのであれば、先に表示される語にはその基本的な意味に近い解釈が与えられ、後の語を解釈する際には、先の語の解釈に合わせるためにメトニミーが起きることになる。

本論では、語順が語の意味とその解釈にどのような影響を与えるのかという問題を考えるための枠組みを設定し、日本語と英語の例を挙げて句の内部における意味情報の分布について考察した。

しかし、取り上げた動詞の数が限られているため、一般にどのような意味要素が、句の意味を構成する際に、先に表現されやすいのかという問いには答えてはいない。この問いに答えるためには、文の理解の仮説を見直しながら、さらに広い範囲の事例を考察をする必要がある。

注

- 1 認知言語学一般については、次の文献を参考にした。Lakoff (1987), Langacker (1987, 1990, 1991), Taylor (1989), 山梨 (1995, 2000)。語の意味を記述する際の考え方は、これらの文献に依存するところが多い。
- 2 したがって、小論の目的は統語解析 (parsing) について考えることではない。統語解析の研究においては、語を時間順に (つまり左から右へ) たどりながら、文法規則を用いて文の構成素構造を構築するモデルが提案されてる (例えば、Hawkins (1990, 1994), Frazier and Clifton (1996) 参照)。この種の研究は、語順と統語構造には注目するが、語順が語の意味にどのような影響を与えるのかという問題には関心を示さないと思われる。
- 3 日本語の例文は、参考文献表に記した辞典からそのまま引用したものと部分的に変えたものがある。いずれの場合にも、例文の容認度の判断は筆者の直観による。
- 4 この部分の記述は『例解新国語辞典』を参考にした。
- 5 このような分析の例としては、田中 (1996) がある。
- 6 この区別は、『小学館プログレッシブ和英中辞典』による。
- 7 以下の英語の例文で、文末に出典を示していないものは、すべて Word Bank in *COBUILD on CD-ROM* からの例である。また、英字と数字を付したものは、Brown Corpus からの例である。
- 8 この部分の記述は、LDCE の小見出し look at の 3 と 4 を参考にした。
- 9 Langacker (1990) は、活性領域 (active zones) の分析をする際に動詞 hear の多義性を取り上げている。彼の用語を用いて言えば、「聞く」listen, hear の活性領域は、〈話〉または〈音〉ということになる。さらに、英語では音源をプロファイル (profile) することができるのに対して、日本語では音源は、本来音源として理解されている対象を除けば、プロファイルすることはできないということになる。このような用語を用いても現象の記述はできるが、なぜこのようなことが起きるかという問題に答えたことにはならない。本稿では、この問題を語順に関わる概念を用いて明確にすることを試みる。

参考文献

- Frazier, Lyn and Charles Clifton, Jr. (1996) *Construal*, MIT Press, Cambridge MA.
- Hawkins, John A. (1990) "A Parsing Theory of Word Order Universals," *Linguistic Inquiry* 21: 223-261.
- Hawkins, John A. (1994) *A Performance Theory of Order and Constituency*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I: Theoretical*

- Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol : The Cognitive Basis of Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II : Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- 嶋田裕司 (2000) 「『姿』の出没——日本語と英語の視覚動詞の補部——」『群馬県立女子大学英語英米文学研究』第2号 11-23。
- 田中聡子 (1996) 「動詞『みる』の多義構造」『言語研究』第110号 120-142。
- Taylor, John R. (1989, 1995) *Linguistic Categorization : Prototypes in Linguistic Theory*, Oxford University Press, Oxford. 辻 幸夫訳 (1996) 『認知言語学のための14章』紀伊國屋書店。
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房。
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版。
- 『大辞林』(1988) 三省堂。
- 『日本語 基本動詞用法辞典』(1989) 大修館書店。
- 『基礎日本語辞典』(1989) 森田良行 角川書店。
- 『例解新国語辞典』第五版 (1997) 三省堂。
- 『小学館プログレッシブ和英中辞典』第2版 (1993) 小学館。
- Brown Corpus, *ICAME Collection of English Language Corpora, Second Edition* (1999) The HIT Centre, University of Bergen, Norway.
- COBUILD on CD-ROM* (1995) HarperCollins Publishers Ltd.
- LDCE=*Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition* (1995) Longman Group Ltd, Essex.